

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第78回）

## 「大伴旅人・帰京に際しての歌」

① 大伴旅人が奈良時代、地方最大の役所であることから「遠の朝廷」と呼ばれた九州・大宰府の長官（大宰帥）だざいのそちとして赴任したのが神亀四（727）年末から翌年春頃とされる。

② 旅人は大宰府に赴任後ほどなく、長い間連れ添ってきた愛妻大伴郎女おおもとのいらつめを病で亡くしている。万葉集には悲嘆にくれて詠われた亡妻挽歌、と大宰府在任中に故郷を懐かしむ望郷歌が多く詠われている。

③ 天平二年（730）十二月大宰帥大伴旅人が大納言に昇任していよいよ都に帰れる時に喜びを通して妻を亡くした悲嘆の気持ちを詠っている。次の題詞の二首がある。

「大伴旅人、京に向ふ時に臨ちか近づきて作る歌

二首」

1) 帰るべき 時はなりけり

都にて 誰が手本をか  
た たもと

まくら

# 我が枕かむ

卷三―439

(解説)

① いよいよ都(奈良・平城京)に帰られる時になった。だが都でいったい誰の腕を、私は枕にして寝ようというのか。

② 自分が手枕をする相手のいないこと嘆いていている。帰京の喜びを通して、悲嘆の具体性と切実感を詠う歌であろう。

\* 「手本」は手首。袖口あたり。

## 2) 都にある 荒れたる家に

ね

ひとり寝ば 旅にまさり  
て 苦しかるべし

卷三―440

(解説) 妻のいない都(奈良・平城京)の、荒れた家に帰りたったひとり寝るのは旅(ここにいう旅は異郷・筑紫「九州・大宰府」の生活をいう説がある。)にもましてわびしくつらいことであろう。

(参考文献) 新潮日本古典集成 等

(写生地) この歌二首は大伴旅人が大宰府赴任後、ほどなく亡くした妻としばらくの間、過ごした邸宅で作られたであろうと思われる。今、旅人邸があったとされる有力地と推定されている大宰府政庁跡北西にある坂本八幡宮が鎮座する(福岡県大宰府市坂本) 周辺と背景に旅人をはじめ大宰府の官人らが朝夕に親しんでいた風景であったろうと思われる、また、万葉集(巻五―795)に詠われている大野山(現・四王寺山)を描く。

(池田杏花)

・なお、この地は天平二(730)年正月13日に旅人が邸宅に役人らを招き梅の花を題材にした歌会「梅花の宴」が開かれそこで詠まれた「梅花の歌32首」の序文から新元号「令和」が引用されたとされる。

